

3年前に館山市立博物館で田中藩本多家についての資料を得、この3月に長尾藩に関わる企画展が行われることを知り、行って来ましたのでまとめ、報告します。

長尾藩とは、流山の一部を治めていた駿河国田中藩本多家が、明治に房総の長尾に移封した後の名称です。4年後の1871年の廃藩置県により藩としての歴史を閉じました。

- 資料
- ・令和2年度館山市立博物館企画展(2021,2,6～3,21)「武士たちの明治」図録
 - ・昭和59年年度館山市立博物館企画展 房州長尾藩「明治維新の大名と武士たち」図録
 - ・「長尾藩の史跡をめぐる」館山市立博物館作成マップと記載の説明
 - ・現代語訳 田中藩史譚 池谷盈進著 註釈仲田義正
 - ・安房の人物シリーズ② 恩田仰岳 平成6年 館山市立博物館

1、長尾藩について

年号	西暦	出来事
慶応3年	1867	10月14日 江戸幕府15代将軍徳川慶喜が大政奉還を奏上 15日 明治天皇が奏上を勅許 12月9日 王政復古
慶応4年 明治1年	1868	2月8日 田中藩 勤王の証書を新政府に提出 3月14日 新政府の基本方針「五箇条の御誓文」が示された。 15日 太政官から「五榜」が出される。6年まで高札場に提示 第1札 儒教道徳を守ること 第2札 集団による強訴の禁止 第3札 キリスト教の禁止 第4札 万国公法に従うこと 第5札 武士や庶民が主家から脱走することの禁止 徳川慶喜は謹慎し、家督を継いだ家達は、一大名となり、駿河・遠江・三河国の府中藩主になる。その結果、駿遠両国に領地をもっていた7家に及ぶ諸藩は、旗本領が無くなった安房への転封を明治政府により命じられた。 図1 7月13日 駿河国田中藩は、長尾藩4万石として移封の通達を受けた。 7月26日 藤枝の寺院に藩主も藩士も仮宿した。 滝口村から白浜村に広がる長尾川中流域(南房総市白浜町滝口)の段丘や旧河道の谷地を開墾して城地を建設し、仮役所を設けた。藩の兵学者で藩主の信頼の厚い恩田仰岳が、海岸まで迫った丘陵に取り囲まれた天然の要害ともいえる場所で、嘗て里見氏が居城とした白浜城址に連なる地を選んだが、土地の狭さや地の利の悪さから藩士には不評だった。 図3 (長尾城では藩士の居住屋敷を優先的に造成していったことが発掘調査で確認された。)
明治2年	1869	正月から5月頃にかけて、藩士の移住が行われた。東海道を移動して三浦半島浦賀から船に乗ったり、焼津から直接白浜に渡ったりした。 藤井家文書集 藤井六郎は、藩主から15両の手当てを貰い、藤枝から東海道を旅し、西浦賀から船に乗り、那古に上陸、白浜へと到着。7日程度であった。

		<p>6月20日 版籍奉還</p> <p>藩が所有していた土地と人民が天皇に変換されると、藩は明治政府の地方組織になり、藩主は知藩事として地方長官になった。知藩事は華族、藩士は士族として呼ばれるようになり、武家奉公人の足軽や中間は卒族<small>そつぞく</small>とされた。藩士の格式差はなくなり、一律に藩の職員となった。上級家臣の俸禄は削減され、従来の家老にあたる参事は政府の任命になり、中央集権化が進んだが、税の徴収や藩士の家禄支給は藩独自で行った。</p> <p>7月～8月 台風により建設中の陣屋倒壊。基礎工事が軟弱だったと言われている。</p> <p>幕末に海岸警備の陣屋が置かれていた館山湾に面した北条（館山市）に陣屋が移設することになった。</p>
明治3年	1870	<p>1月 北条での陣屋建設が始まった。図2，図4長尾藩ゆかりの地図マップ</p> <p>5月 本多正訥<small>まさもり</small>（12代、文芸に秀で天下の三公子とうたわれた。初代昌平坂学問所奉行・駿府城代を勤めた。藩政を担う人材を育成するため藩校を開設、18年に死去）は長尾藩知事となり、北条陣屋へ着任</p> <p>10月 北条村鶴ヶ谷に陣屋が全面移設、陣屋には藩主邸、藩庁、工作役所、学校、番屋などがあった。藩士たちは陣屋を中心に広がり、鶴ヶ谷に、北条村新塩場、八幡村、国分村萱野<small>かやの</small>、正木村の海岸林の中に屋敷地を作り、移住した。</p> <p>藩士の戸数512戸（士族は家族を含めて2064人、卒族241人）</p> <p>11月 徴兵規則が制定、各府藩県より士族・卒族・庶民にかかわらず、1万人に5人を徴兵する。</p> <p>12月 本多正訥<small>まさもり</small>は養子正憲<small>まさのり</small>に家督を譲った。正憲は2代目知藩事となった。（正憲は廃藩後、宮中に仕えた。）</p>
明治4年	1871	<p>7月4日 廃藩置県、長尾藩は長尾県になった。（廃藩置県とは、藩を無くし、府・県を置いた行政改革。知藩事は解職され、東京への居住が義務化され、新しい県では知藩事不在になり、藩主と藩士たちの関係が切り離された。藩士は県の職員として、政府からの直接支給になった。） 1616年本田正重から256年間の歴史が終わった。</p> <p>11月13日 県の統合、安房・上総にあった15県を合併して木更津県とし、政府が任命した藩とは無関係の県令（1886年以降は県知事の名称）が赴任。武士は職を失った。</p>
明治6年	1873	<p>1月 陸軍省から徴兵令が発布（明治22年に法律として改正）士族と武力が切り離された。6月15日 印旛県と木更津県が合併して千葉県となった。</p>

2、士族の生活の変化

年号	西暦	出来事
明治2年	1869	12月2日 禄制が制定され、華士族の俸禄が削減された。
明治4年	1871	12月18日 太政官布告 在菅者以外の華族・士族・卒族の職業自由が許可された。
明治5年	1872	4月4日 明治5年式戸籍 壬申戸籍ともいう。

明治6年	1873	<p>7月28日 地租改正条例布告</p> <p>土地の値段（地価）と所有者を定め、地価の3パーセントを税として現金で納めさせることで天候などで左右される米の収穫と異なり、政府の安定した収入を確保するために行われた。</p> <p>根岸家文書「旧長尾藩華士族家禄渡高覚」</p> <p>5月に引渡しの家禄の記録文書、年4回、一回につき、華族473石、士族511名5石4斗6升から1石8斗2升までの5ランク、</p> <p>家禄は年金のようなもので世襲、全国の3分の1の士族が交付、家禄には税金がかかった。1石の価値は博物館に聞いてみたが米相場に変動があるので分からないとのこと。</p> <p>12月 明治政府布告「家禄を奉還した士族へ資金を支給する。」希望制で起業資金を与えるために、家禄6年分が支給、半分は現金、半分は年8パーセントの利子が付く秩禄公債を交付。家禄の低い困窮士族を帰農帰商させるため官有の山林、田畑、荒蕪地（荒れて雑草などが生い茂った土地）を時価の半額で払い下げる政策もとった。</p> <p>秩禄とは、明治政府が華族・士族に支給した家禄と賞典禄（維新功労者への禄）を合わせていう。</p> <p>文書 「明治8年2月17日 日記」 小川氏蔵 奉還願の書き写し</p> <p style="padding-left: 40px;">石高14石5斗6升の家禄は580円の現金と70円分の秩禄公債証書になった。</p>
明治9年	1876	<p>3月28日 廢刀令布告</p> <p>8月 金禄公債証書発行条例制定、秩禄の支給を止め、売買が可能な金禄公債を交付。抽選で選ばれた者が額面の金額を受け取る仕組み、額面によって利子がつき、15年から償還開始39年に完了。少額の利子しか現金収入がなくなり、受け取れない下級武士は困窮。</p>
明治27年	1894	<p>館山平野に居住する士族を中心に親睦団体「同誓社」を作った。117名加入、就産事業を試みた。（大正時代に入っても各地域に親睦組織が作られ、本田家の氏神稻荷神社を祀った。）</p>
明治31年	1898	<p>10月 長尾士族171名による家禄の不足額請求運動がおこった。</p>
明治33年	1900	<p>藩主子爵本田家に旧臣名簿を備えて移動連絡の拠点にした。</p> <p>藩士人名住所名簿記載</p> <p>東京府149名 千葉県に169名 静岡県に109名、その他16名 計443名</p> <p>多くは農工商に携わったが、新しい行政・政治・文化をリードする人々もでた。</p>

3、その他

・落首

明治元年 徳川の亀に追われて房州へ来（き）い（紀伊）ともいわず行くがほんだ（本多）か
明治2年 長尾村に本多の城ができるという ほんだ（本多）けれどもなごう（長尾）保たん

- ・恩田仰岳 兵学者、西洋式砲術と洋式訓練を長尾藩に導入し、藩主の教育にもかかわり、藩主からの信望が厚かった。長尾城建設を推し進め、陣屋の崩壊で、譴責を受け、やがて職を辞し、その後教育者として地域に尽くした。城の建設地を考えた時に幕末に騒ぎのあった館山を避けたのではなく、あくまでも軍事的な観点から長尾を選んだと言われている。
- ・千葉銀行 金禄公債証書は銀行設立にも出資利用できたので、千葉町に設立された第九十八国立銀行に出資した士族が多く、後に千葉銀行になった。初代頭取 藩知事本多正憲の弟 本多埴麿
- ・藤田嗣治 明治 19 年北条町うまれ 長尾士族陸軍軍医総監の藤田嗣章の子
- ・成瀬政男 士族の 3 世、歯車の研究、自動車産業の国産化に貢献
- ・小野鷲堂 書家 学習院教授 現代のかな書の基礎を作る。

○北条陣屋（長尾藩） 安房高校から 6 軒町の諏訪神社までの地域で 鶴ヶ谷

明治 3 年 長尾藩が陣屋を移転した場所は、内房で幕末に海岸警備にあたった武蔵忍藩（埼玉県行田市、1842 から 1853 年まで、ペリー来航まで）や岡山藩（1853 から 1858 年、日米修好通商条約の締結で岡山藩は解任）の陣屋が置かれていたところで警備施設はほぼ廃止していた。交通の便が良く、周りに藩士の住居を取りやすい土地であった。

○館山陣屋

天明 1 年（1781）稲葉正明が館山藩（1 万石）藩主となって館山に入ったが、2 代正武が館山城（里見氏が建て廃城となっていた）の麓に館山陣屋を作った。大部分の家臣は江戸屋敷に詰め、館山陣屋の勤番藩士は少なかった。稲葉藩館山陣屋から、長尾藩鶴ヶ丘陣屋までの距離は 2、3 キロで近い。

慶応 4 年 1 月 鳥羽伏見の戦いの後、館山藩主稲葉正巳まさみ隠居謹慎、新政府に恭順、館山に塾居館山藩江戸詰め藩士（1858 年には 81 人）が 10 人を残して館山に戻ることを新政府軍に届け出る。

5 月 元館山藩主稲葉正巳が「幕府の要職にありながら、将軍が鳥羽伏見での戦闘に及んだことを止めなかった」罪を許される。藩主稲葉正善の謹慎も解かれる。

明治 2 年 3 月 館山藩、版籍奉還を上申、6 月に認められる。

家臣たちの住居地図は残っているが、この地に留まった家臣はほとんどいないという。そのことを博物館の学芸員は、「長尾藩の人々は覚悟が違う。」という。

○幕末の館山について

慶応 4 年 4 月 旧幕臣の旗本たちが房総での抵抗を試みた。

館山湾に榎本武揚率いる旧幕府軍艦が停泊、8 月に函館に向かった。

木更津請西藩主が脱藩、旧幕府軍、勝山藩・館山藩の脱藩藩士ら約 300 人で館山湾から新政府軍に向け出撃

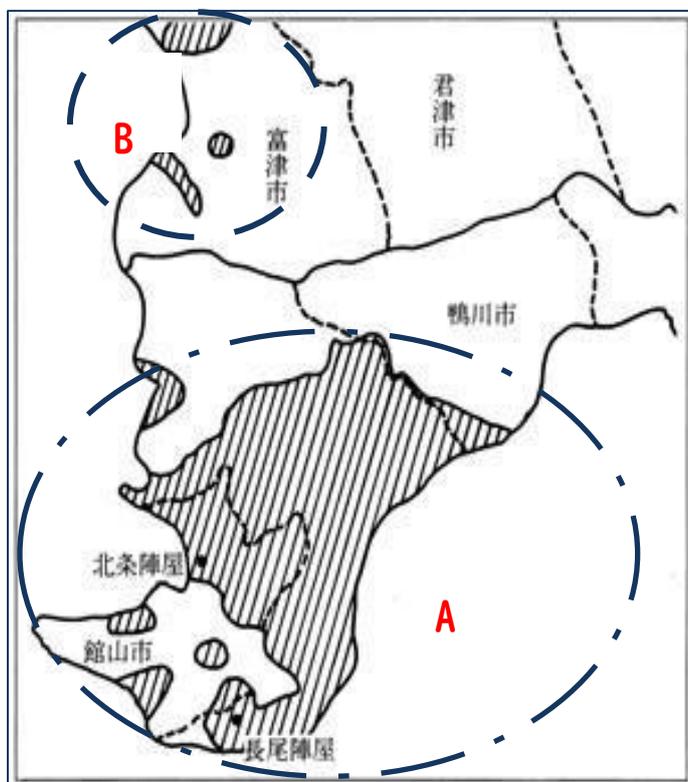
調べて

大政奉還から始まる大きな変動は、藩によって違うだろう。田中藩のように、まったくゆかりのない土地に移封が突然決まり、移らざるをえなかった藩では大騒動であったと思う。版籍奉還・廃藩置県により藩が無くなり、徴兵令・廃刀令で武士たちの武力としての扱いも違っていった。それだけではなく、明治 6 年「家禄を奉還した士族へ資金を支給する。」9 年「金禄公債証書発行条例制定」などの政策で経済的にも追い詰められていった。いままで培った武で、警官・軍人・武道道場主に、学問で、役人・教師・塾教師になった人々も出た。全く違う職業を選び、新しい文化の担い手になった人もいるだろうが、困窮に追いやられた人たちが多かった。長尾藩で助け合いの組織が作られたこと、かなり経った後も元藩主との繋がりがあったことは興味深い。長尾藩の行く末を調べることによって、明治政府の様々な政策の人々に与えた影響を少しではあるが理解できたと思う。

図1 明治元年駿遠から房総に移った藩



図2 長尾陣屋と北条陣屋の位置



所領  長尾藩成立時 計 177 ケ村

A 安房国内 162 ケ村 (現南房総市、現鴨川市、現館山市) の一部

B 上総国内 15 ケ村 (現富津市)

図3 長尾城跡 昭和59年図



長尾藩ゆかりの地マップ

